

2020年12月3日（木）

せとうち美術館サミット サミット講演会・定時総会

# 作品と鑑賞者を結ぶ デジタル鑑賞ツールの開発と実践の取り組み 鳥取県立博物館との共創事例から

東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科（博士課程）

畑山 未央

# 自己紹介

- 横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育デザインコース 教育実践専攻 美術領域 修了（2015年）
- 東京家政大学 家政学部 児童教育学科 助教（～2020年3月）
- 東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科 博士課程 在学中
  - 日本大学芸術学部 非常勤講師
  - 東京福祉大学通信教育課程 非常勤講師
  - 東京都内保育園 造形講師

# 自己紹介

東京都庭園美術館（東京都港区） 教育普及インターン  
(2014年～2015年)



東京都庭園美術館 本館



ウェルカムルーム

# 自己紹介

新刊紹介

共編：山本朝彦，せとうち美術館ネットワーク事務局

今、ミュージアムにできること—せとうち美術館ネットワークの挑戦—

畑山未央（東京家政大学）

## 1. 「せとうち美術館ネットワーク」に向ける編者のまなざし

「せとうち美術館ネットワーク」は、瀬戸内海地域美術館や博物館などの文化芸術施設をネットワーク化し、地域の交流促進および活性化、子ども達の美術鑑賞教育の普及を図ることなどを目的として2008年10月に発足した。このプロジェクトは、高速道路を維持管理する本州四国連絡高速道路株式会社がメセナ活動の一環として始めた事業で、企業と、アドバイザーである多数の研究者と、そしてネットワークに参加している72の文化芸術施設（2020年1月現在）との共創により、一帯の芸術・文化振興の確実な活性化につながっている。

さて、本書『今、ミュージアムにできること—せとうち美術館ネットワークの挑戦—』は、「せとうち美術館ネットワーク」10周年を振り返り、毎年の取り組みの一環である特別講演会に登壇した演者のエッセイを中心に、アドバイザーらの論考を加えた理論と実践の両面から構成されている。タイトルに込められた意味について、編者の山本朝彦が「まえがき」にて触れているので、その言葉に耳を傾けてみよう。

「急速に浸透し始めたアートマネジメントという領域の言葉を借りるなら、『今、ミュージアムにできること』の中心に、〈地域の魅力を活かした鑑賞者開発〉という課題を捉え、さらなる発展を目指すことこそ、本ネットワークの挑戦になるはずだ。それはまた、今世紀前半、世界のミュージアムが取り組むべき共通の挑戦になるでしょう。」

学習観や知識観が変化する時代の中で、文化芸術施設の教育・普及機能も地域市民の多様な学びや「ウォンツ」、複雑化する社会情勢などに寄り添いながら、経験や学習や価値をどのように生み出すかへと役割を変えつつある。その役割は、人とモノの結びつきを越え、地域の特徴や館固有のリソースなどを媒介に人と人とを結びコミュニケーションのデザインとも言えるかもしれない。

## 2. 本書の内容

本書の章立てと、それに基づくバラエティ豊かな論考についてピックアップしてみる。紙幅の関係上、全ての論考に触れることが困難なのが心苦しいが、各タイトルが非常に有意義なので、是非お手にとってご覧いただきたい。

第1章は美術館内で創出された実践に関する論考である。大原美術館、平山郁夫美術館、兵庫県立美術館、大分市美術館、岡本太郎美術館、世田谷美術館、東京国立近代美術館、板橋区立美術館の各館における歴史的文脈や教育普及プログラムの取り組みなどについて、来館者の学びのプロセスを辿りながら詳細に語られている。

第2章は、地域や学校とつながる美術館の実践事例に関する論考である。宮脇理は、横浜美術館子どものアトリエの構想・発足・運営の道程を追いながら、時代の節目に関わった人々の意識を描写し、いまの美術館教育に目を向けている。横浜国立大学の修士課程創設期に宮脇が果たした役割の大きさが理解できるとともに、当時の院生達が、今で言うアクティブ・ラーニングを行っていたことにも気付かされる。濱口由美は、徳島県立近代美術館との連携による鑑賞学習教材の開発から実践に至るまでの取り組みや福井市美術館との共同による「多言語ストーリーテリング」のプロジェクトなどの成果を鑑み、「他者と共に育つ鑑賞教育」の提案を行っている。高松智行は、自身の教員としての多忙な日常の軸を「外界」へ移行すべく駆け込んだ美術館での鑑賞体験を基に、そこでの価値を目の前子ども達と共有することで得られた教師と子ども間の新たな関係性と意義について、教師が抱える現状に寄り添う目線で論じている。井上由佳は、ミュージアムをつなぐネットワークに着目し、日本と英国の事例と役割を比較しながら「せとうち美術館ネットワーク」の意義に立ち返り、今後は人と人をつなぐ人的交流が必要であると展望している。山本朝彦は、英国のテイト・ギャラリーの歴史的文脈を概括しつつ、TATEが有する教育機能の媒体や方法について詳細に紹介している。とりわけ、美術分野だけでなく、他教科の領域まで架橋する教材、ミ



ージアム連合体が運営するプロジェクトを通した参加者の社会的認識の深化のあり様などを「せとうち美術館ネットワーク」の今後と結びつける慧眼に読者は多くを学ぶであろう。

第3章は、ミュージアムのネットワークポロジの論考である。前田ちま子は、かつての自身の米国調査で見たHands-on, workshop, VTS (Visual Thinking Strategies) の理念や実践を時系列で追い、日本の美術館教育や学校との連携への影響を論じている。美術館教育の様相を迷いの森に喩え、出口の開かれた可能性を俯瞰する流れに我々読者は引き込まれる。赤木里香子・山口健二は、社会教育機関とされる我が国の美術館に従事する学芸員専門性の高さが大学教員のそれと相同性が高まっているとしつつ、一方で両者の“泰仕すべき対象”が異なるがゆえに美術館の学習者支援が多岐にわたることをわかりやすく明らかにしている。同時に、モノを起点とする美術館の教育支援の意義を改めて我々に突きつけている。

第4章は、アートとデザインの鑑賞、創作、研究のための理論的論考である。徳雅美は、美術教育の理念や芸術スタンダード、教員養成プログラムなどについて日米を比較した論考を行い、自身の研究テーマである「描画と美意識の発達の比較研究」につなげながら、描画発達に現れる普遍性と文化的特異性の考察を展開している。渡辺邦夫は、「デザインとは何か?」という問いから、自身の代表的なデザイン実例として「海バス」、「環境保護ポスター/平和ポスター」、「色相環の絵の具の開発」などを紹介・解説し、読者を見事に「デザインの真理」へと導く。そして美術館の役割にデザインを組み込むことへの次なる問いかけを我々に提示している。三根和浪は、「せとうち美術館ネットワーク」を構成する諸施設や活動内容の性格的側面から、その核心は「美術鑑賞」であるとし、まずは鑑賞の構造や発達段階など多角的アプローチから学術的に論じている。その論考に基づき、鑑賞の授業における工夫の観点について我々が享受する機会を提供している。佐二木健一は、生命科学を研究する理系の立場から、工芸教育の重要性を説く。「科学技術が圧倒的な力を持つようになる中で、より良い未来のためにそれを使いこなす人間性が、これからは決定的に重要になってきます」という佐二木の言葉にリンクするように語られる「やむちん」(絆で400年以上の歴史をもつ伝統工芸)との出会いのストーリーは、美術教育に携わる我々に、頼もしくそして説得力をもって響いてくる。金子宜正は、自身の研究の一環であるベルリンの「イッテン・シュレー」でのヨハネス・イッテンと日本人の相互交流について、その事実を易状していく研究プロセスをエッセイ形式にまとめている。また、調査の過程で活用した欧州の美術館や資料館等の文化施設の利用のしやすさや機関同士の連携の充実にも触れ、それらが一般に開かれた文化的施設だけの機能にとどまらず、研究者たちをつなげ、新たな研究を発信するプラットフォームの役割も担っていると結ぶ。

## 3. 魅力の所在

我々が手にする博物館や美術館に関する書籍、とりわけその教育に関する我が国の論考は、理論に基づく内容や各施設の実践事例の紹介というコンテキストが主流な印象である。それを踏まえると、本書を読むにつれて、それらのコンテキストに研究者・学芸員や来館者、教師、子ども達の生々しい息づかいがエッセンスとして加わっている感覚を憶えることができる。言い換えれば、我が国のミュージアム教育の論考の慣例的なアプローチを越えて、実践家の思惑と来館者の感受や行為の関与が相互作用的に結実していきながら場の意味が形成されていく過程こそ丁寧に描写しているのである。

本書は「せとうち美術館ネットワーク」の様々な取り組みに関するドキュメントを論の核としながら、関係者の専門知と経験知の相互作用によってプロジェクトの意義を理論的に強化している労作である。尚且つ、著者それぞれの「せとうち美術館ネットワーク」に対する期待と展望の眼差しが、地域の魅力を活かしたネットワークデザインのあり様を考える機会を我々に提供してくれる。「せとうち美術館ネットワーク」が発足して10年を越え、またこの先の10年を考える契機となる本書。アートと地域を結ぶマネジメントの取り組みの中で、市民が地域のよさに触れ、気づき、そしてその共同体の中で活動が認知されて拡がっていくという向上的な循環の先に見えてくるのは、きっと紛れもなく〈地域の魅力を活かした鑑賞者開発〉だと思う。

下記に本書への敬意を込めて執筆担当者を掲載します。

### ◆編者

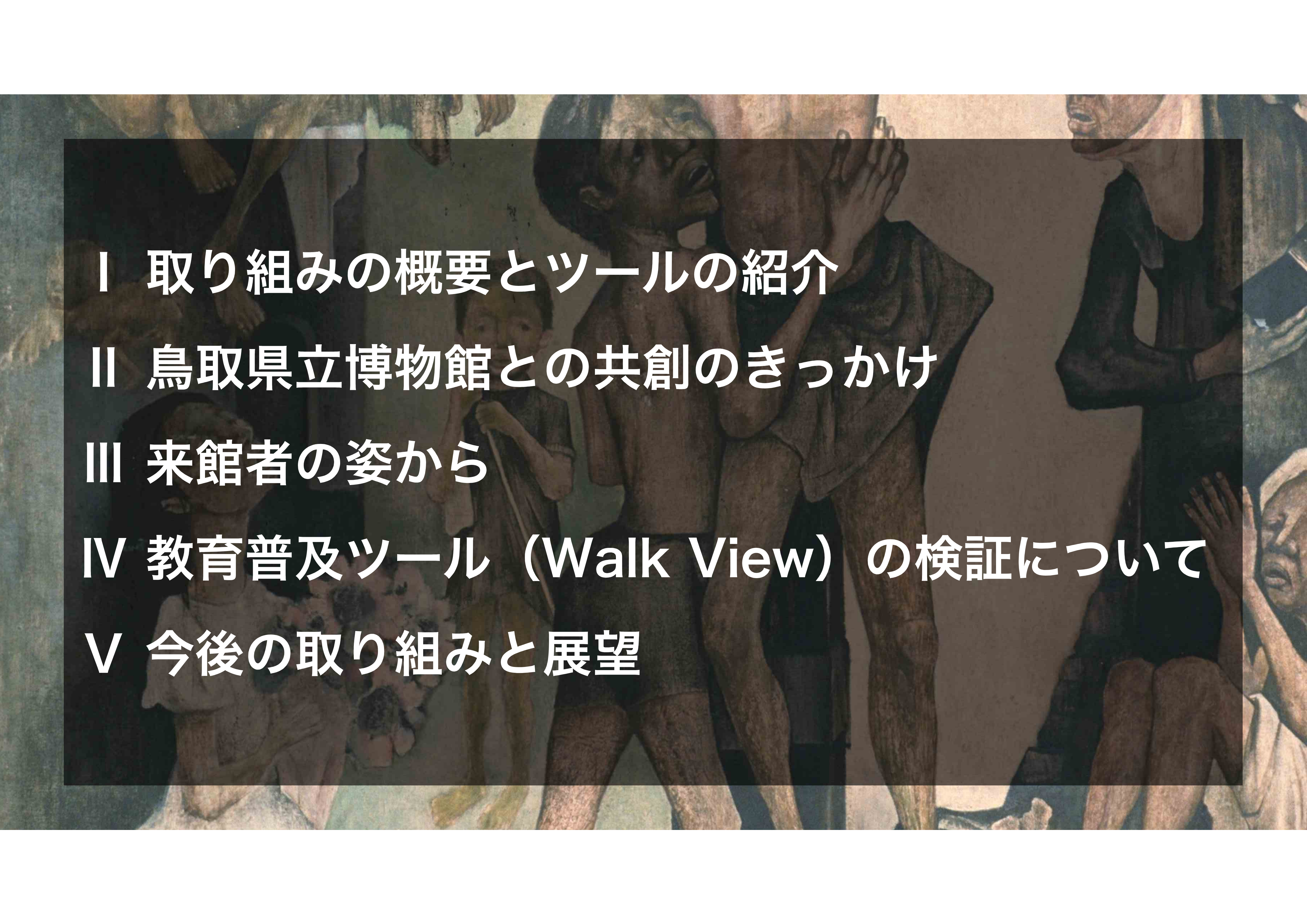
山本 朝彦，せとうち美術館ネットワーク事務局

### ◆著者（五十音）

赤木 里香子，伊藤 周雄，今井 陽子，井上 由佳，大原 謙一郎，金子 宜正，栗原 祐司，酒井 孝志，佐二木 健一，菅 章，高松 智行，塚田 美紀，徳 雅美，仲野 泰生，野呂田 純一，濱口 由美，平山 助成，弘中 智子，前田 ちま子，三原 修二，三根 和浪，蓑 豊，宮脇 理，守田 庸一，山口 健二，山本 朝彦，山下 治子，渡辺 邦夫

◆出版社：学術研究出版 ◆ISBN：978-4-86584-439-9 ◆出版日：2019年11月20日 ◆価格：1,600円＋税

## 美術科教育学会学会通信No.103

- 
- I 取り組みの概要とツールの紹介
  - II 鳥取県立博物館との共創のきっかけ
  - III 来館者の姿から
  - IV 教育普及ツール（Walk View）の検証について
  - V 今後の取り組みと展望



I 取り組みの概要とツールの紹介

II 鳥取県立博物館との共創のきっかけ

III 来館者の姿から

IV 教育普及ツール（Walk View）の検証について

V 今後の取り組みと展望

**〈2015年～2019年〉**

**日本印刷株式会社（DNP）と共同研究**

→もともとDNPが保有していた鑑賞システムを教育用デジタルツールとして再構築

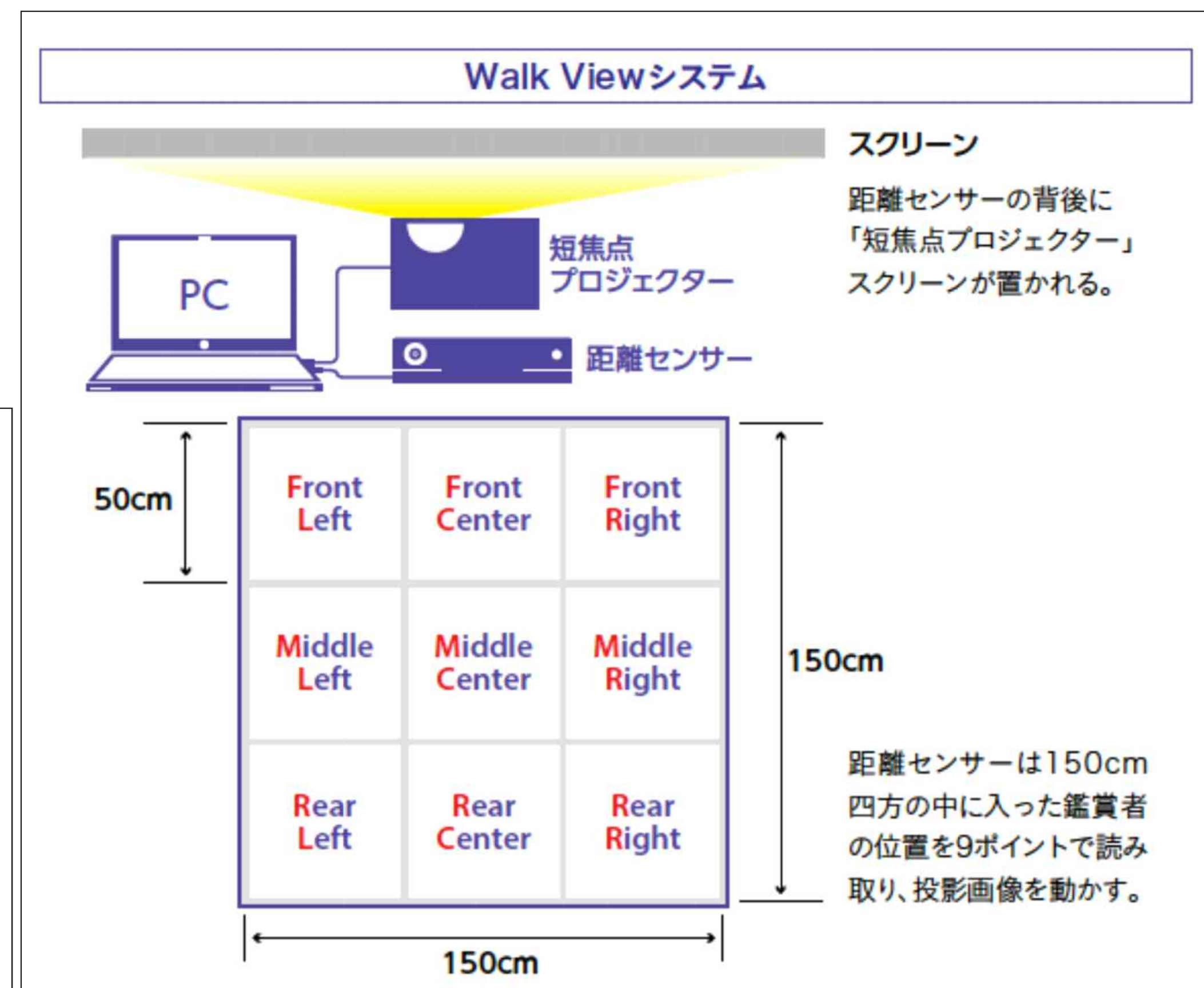
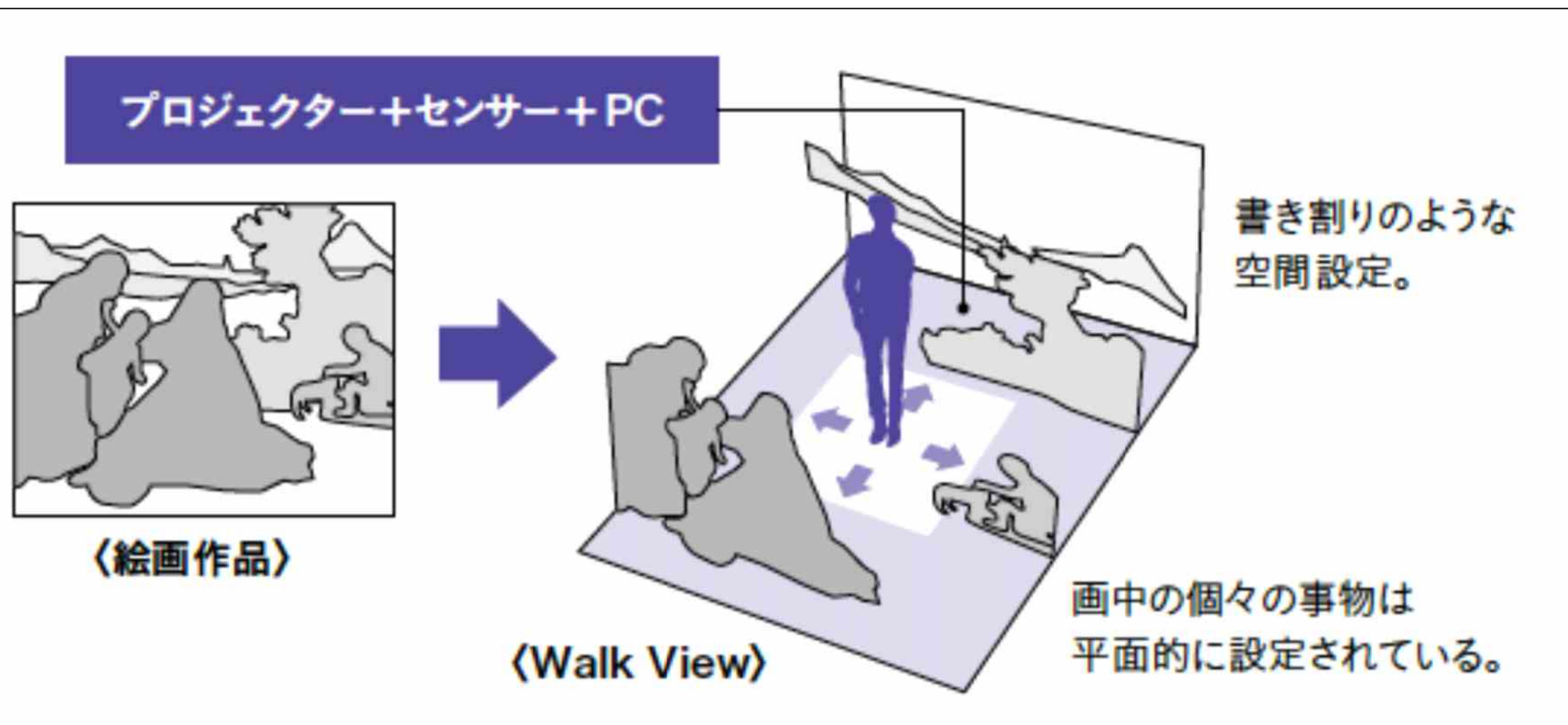
**①Walk View**

**②モチーフ操作アプリ**

**〈2017年～現在に至る〉**

**鳥取県立博物館との共同企画・運営による実践的取り組み**

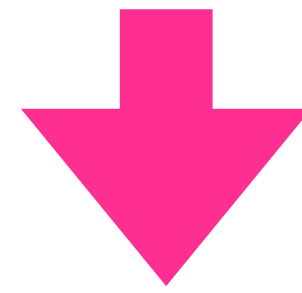
鑑賞者が画面に投影された絵画作品に向かって歩いていくと、  
作品の中に入っていくような視覚体験を味わえるデジタルツールを開発



# 開発と実践に際する研究チームの視座

【博物館および美術館の教育普及】

かつての関心：どのように伝えるか



来館者を能動的な学習者と捉え、館は展示作品や美術史などに関する知識供与を一切の命題とせず、多様な学びやウォンツに寄り添いながら、「来館者の経験や学習をどのように生み出すか」

# 開発と実践に際する研究チームの視座

鑑賞の際に作品の背後に作者の存在を設定すること，すなわち作者の意図を正確に理解することを鑑賞の目的とすることを作者中心の読解であると批判し，「読み手」は「新たな書き手」であることによって，読者＝鑑賞者による作品の創造的な解釈のあり方について述べた

ロラン・バルト（著），花輪光（訳）「作者の死」，『物語の構造分析』，みすず書房，1979年，p.89

20世紀半ば以降，鑑賞者によって完成されることを求める作品が，美術，音楽，建築，文学など多岐にわたる分野で出現したことを報告し，それらの作品に対峙した鑑賞者による解釈は「開かれている」ことを主張

ウンベルト・エーコ（著），篠原資明・和田忠彦（訳）『開かれた作品』，青土社，2011年，pp.89-93

# 開発と実践に際する研究チームの視座

## 【学校教育】

「児童は視覚や触覚などの感覚，自分の行為などを通して身の回りの世界を把握している。そこに児童の経験や発達の状況，伝統や文化などが加わってよさや美しさなどを捉えている。」

鑑賞とは，「児童は対象から感じた形や色，イメージなどを基に，主体的によさや美しさなどを感じ取ったり，**自分なりの意味や価値をつくりだしたりする活動**」

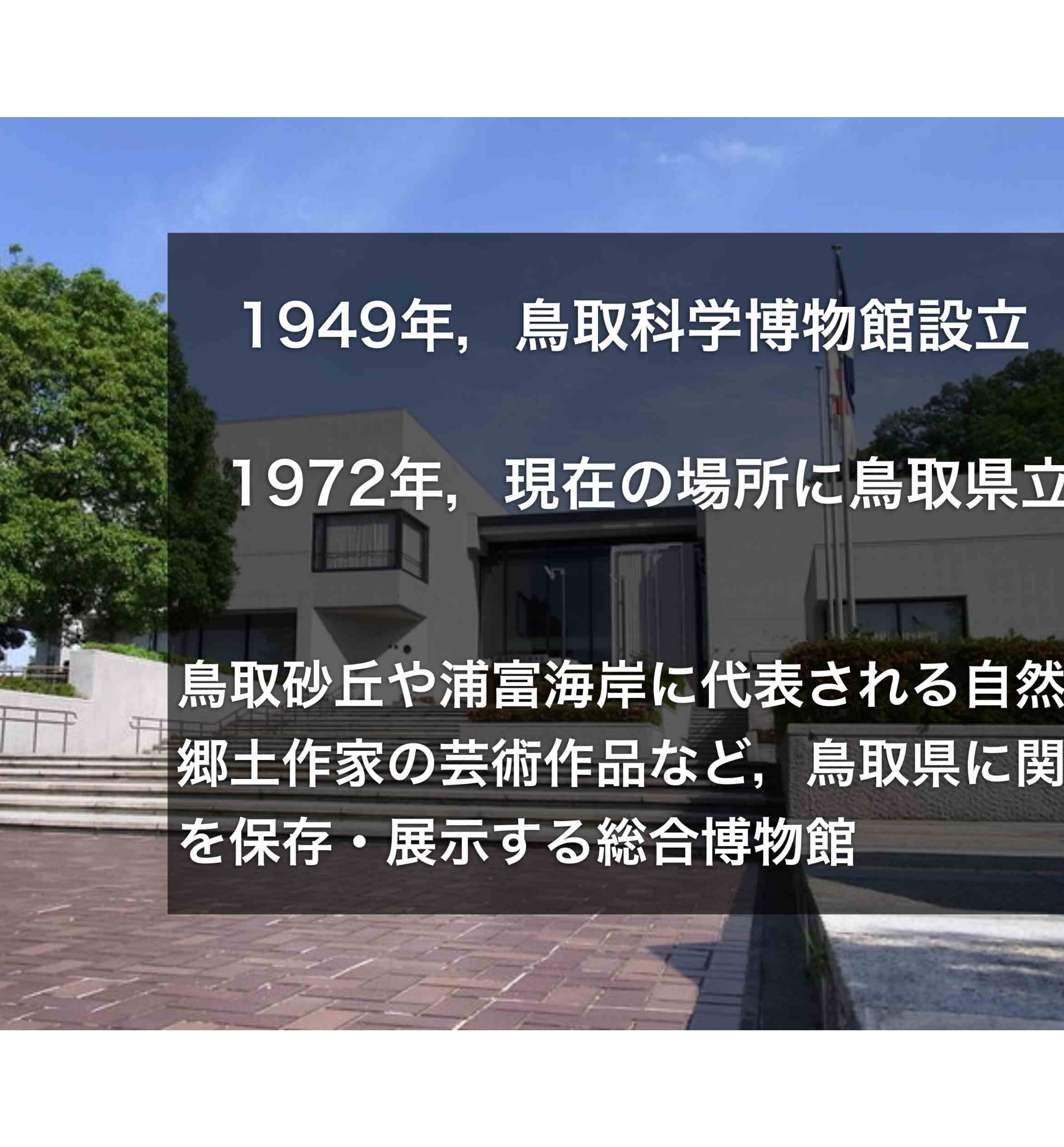
文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』2017年，p.22

「鑑賞は単に知識や作品の定まった価値を学ぶだけの学習ではなく，自分の見方や感じ方を大切にし，知識なども活用しながら，様々な視点で思いを巡らせ，**自分の中に新しい意味や価値をつくりだす活動である**」

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編』2017年，p.29

学校教育においても子供に作品等の知識を授けることを目的とするのではなく，  
作品から感じた造形的な特徴やイメージから**子供自身で意味や価値をつくりだす創造的な営み**

- 
- I 取り組みの概要とツールの紹介
  - II 鳥取県立博物館との共創のきっかけ
  - III 来館者の姿から
  - IV 教育普及ツール（Walk View）の検証について
  - V 今後の取り組みと展望



1949年，鳥取科学博物館設立

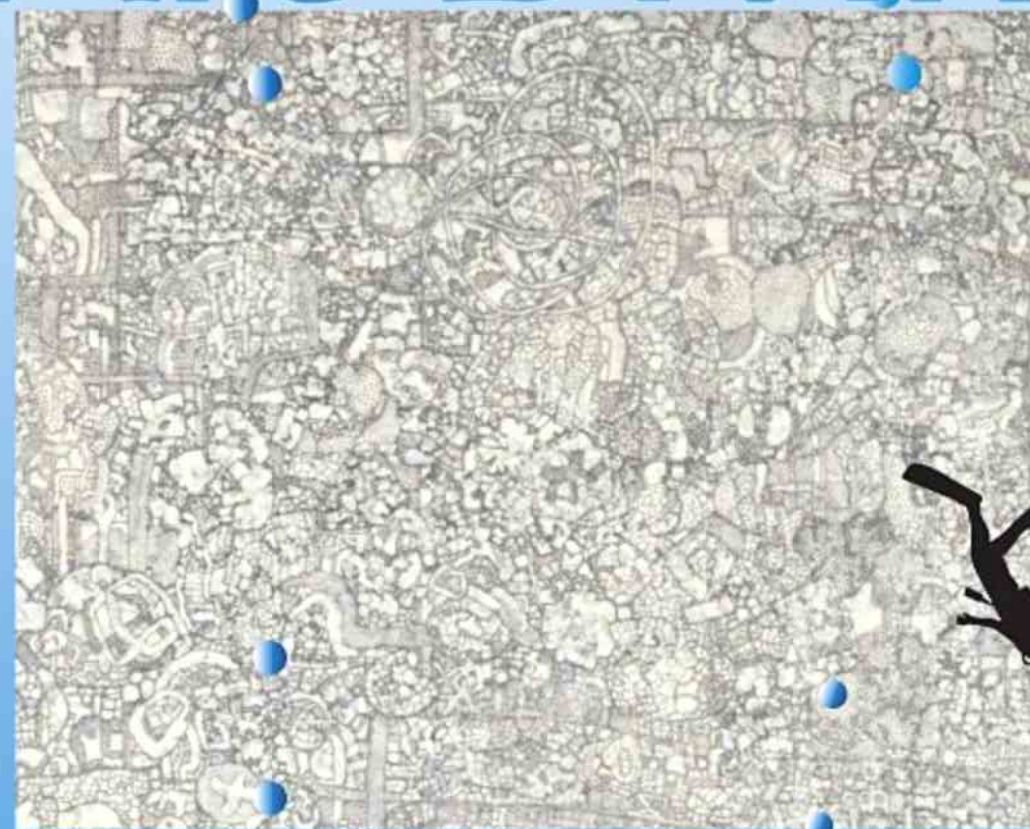
1972年，現在の場所に鳥取県立博物館竣工

鳥取砂丘や浦富海岸に代表される自然，県の歴史，  
郷土作家の芸術作品など，鳥取県に関する様々な資料  
を保存・展示する総合博物館

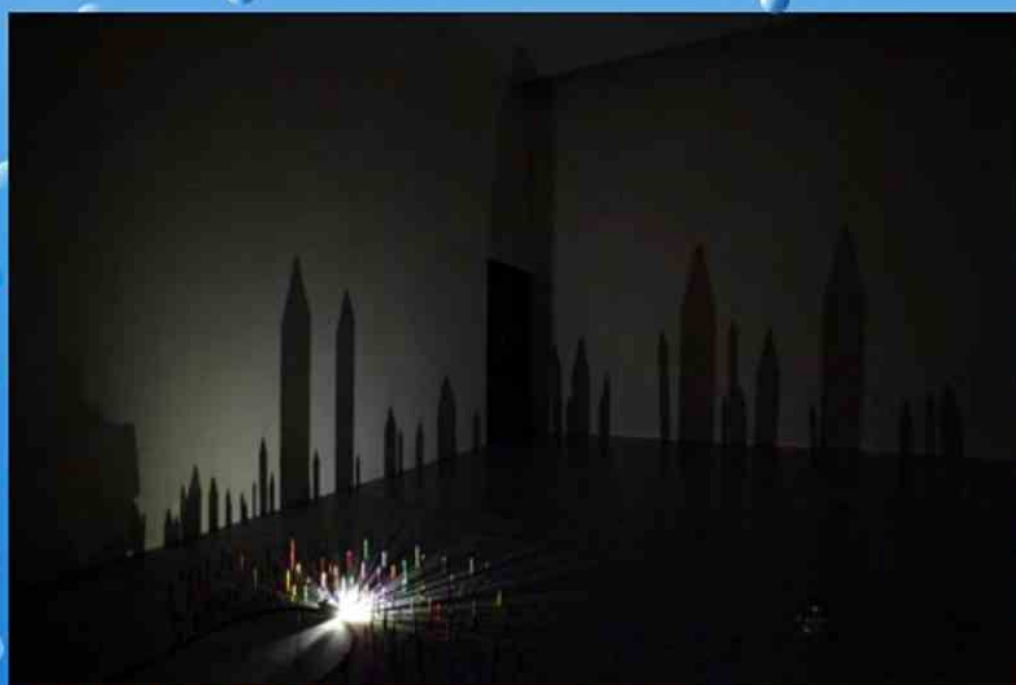


平成29年度 美術部門テーマ展示 I 夏休み企画

# Art Diving!



菅原浩郎《Untitled Continuous File-1988》1928年（部分）



クワクボリョウタ《10番目の部屋（点・線・面）》  
©2010 クワクボリョウタ 撮影：水島良三 写真提供：MIT インターコミュニケーション・センター（ICC）

7月15日|土| — 8月27日|日|

開館時間：午前9時～午後5時（入館は開館の30分前まで）土・日・祝日は午後7時まで開館、会期中無休

会場：鳥取県立博物館 2階 近代美術展示室 観覧料：一般＝180円/20名様以上の団体＝150円

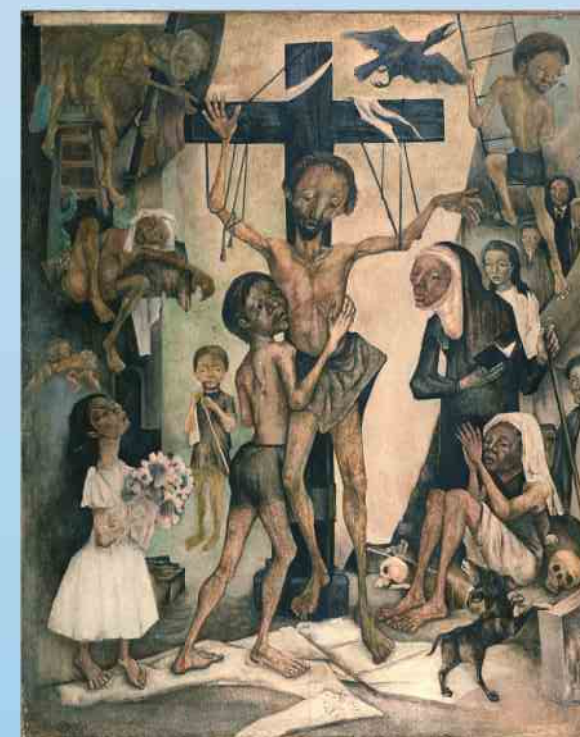
次の方々は無料です。○大学生以下 ○学校教育活動の引率者 ○障がいのある方・難病患者の方・要介護者等及びその介護者 ○70歳以上



鳥取県立博物館  
TOTTORI PREFECTURAL MUSEUM

## Diving Spot 2

### Walk View（ウォーク ビュー）



国頭繁次郎（くにとう・しげじろう 1916年～1969年）  
《十字架より下ろすキリスト》1954年 当館蔵

中央に描かれた十字架とキリスト、キリストの体を支えるように寄り添う人物。よく見るとその周囲にはたくさんの人物や物が描かれています。ウォークビューを使って作品の中に入ったら何が見つかるかな？

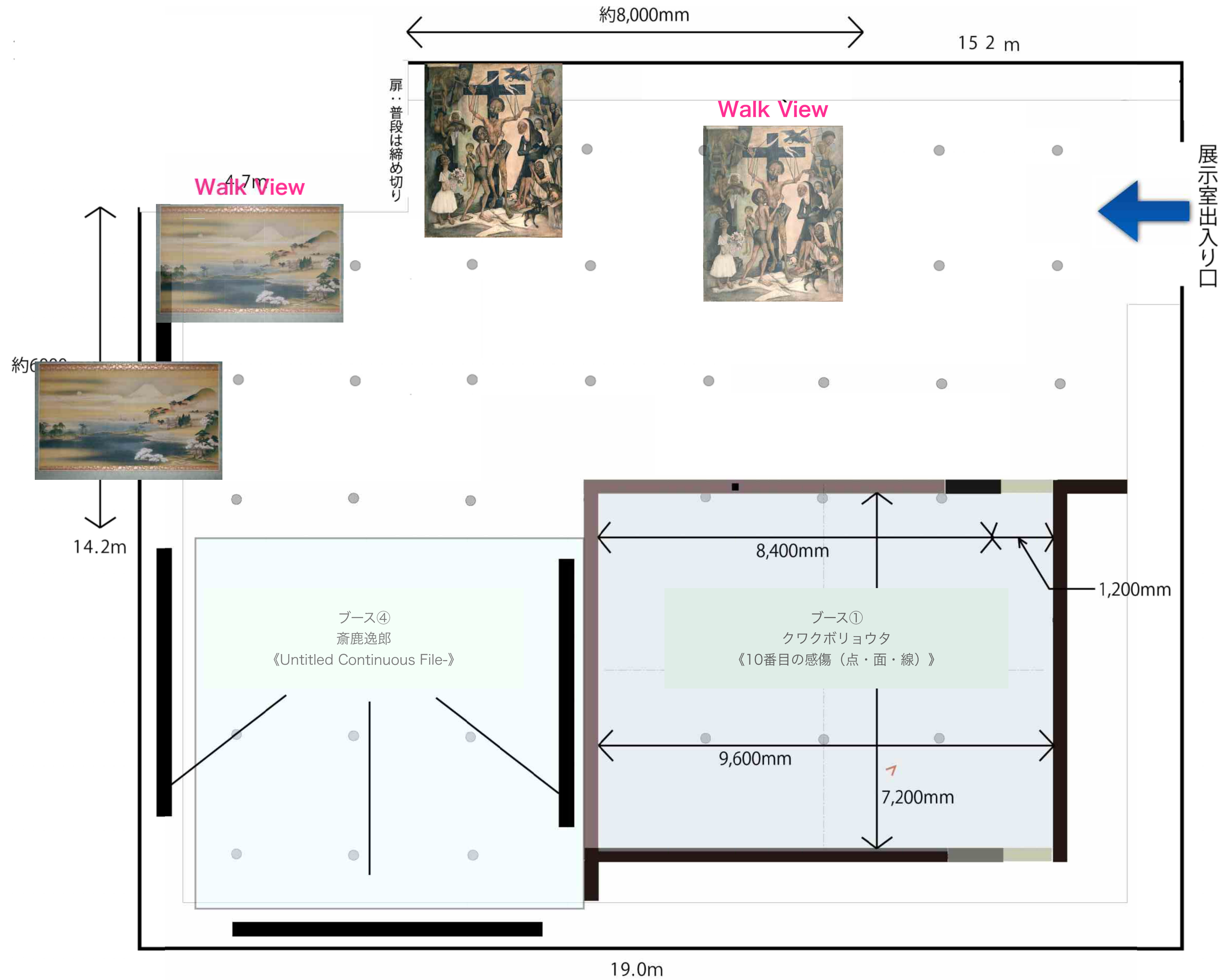
Walk View（ウォーク ビュー）提供  
大日本印刷株式会社 × 美術デジタル教科書研究会



沖 探容《四季富士図》 江戸時代後期 絹本著色 41.0×77.0  
鳥取県立博物館蔵



國頭 繁次郎 《十字架より降すキリスト》  
油彩 1954年頃 130×161.5  
鳥取県立博物館蔵





オリジナル作品とWalk Viewを往還・比較鑑賞できる環境設定の試み



- 
- I 取り組みの概要とツールの紹介
  - II 鳥取県立博物館との共創のきっかけ
  - III 来館者の姿から
  - IV 教育普及ツール（Walk View）の検証について
  - V 今後の取り組みと展望



オリジナル作品



Walk View



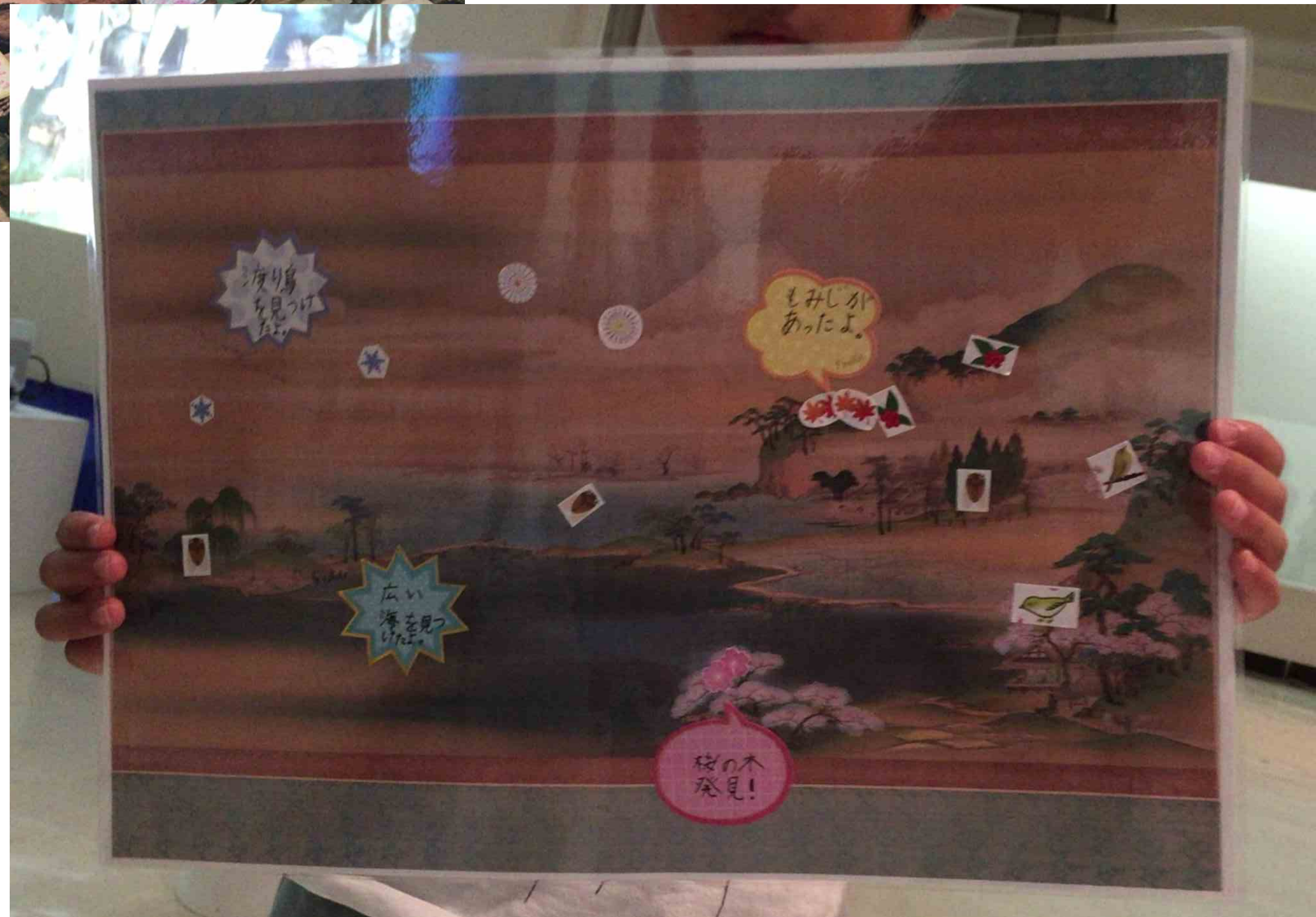
Walk View



Walk View 参加型  
壁に貼っている作品に向かって  
床のマークの上を歩いたり動いてみてください  
（子どもは大人の手を引いてください）  
この活動を通して、作品と向き合い、  
自分自身の体験や想像を表現し、  
作品と対話する機会を創出します。



作品にまつわるアクティビティコーナー

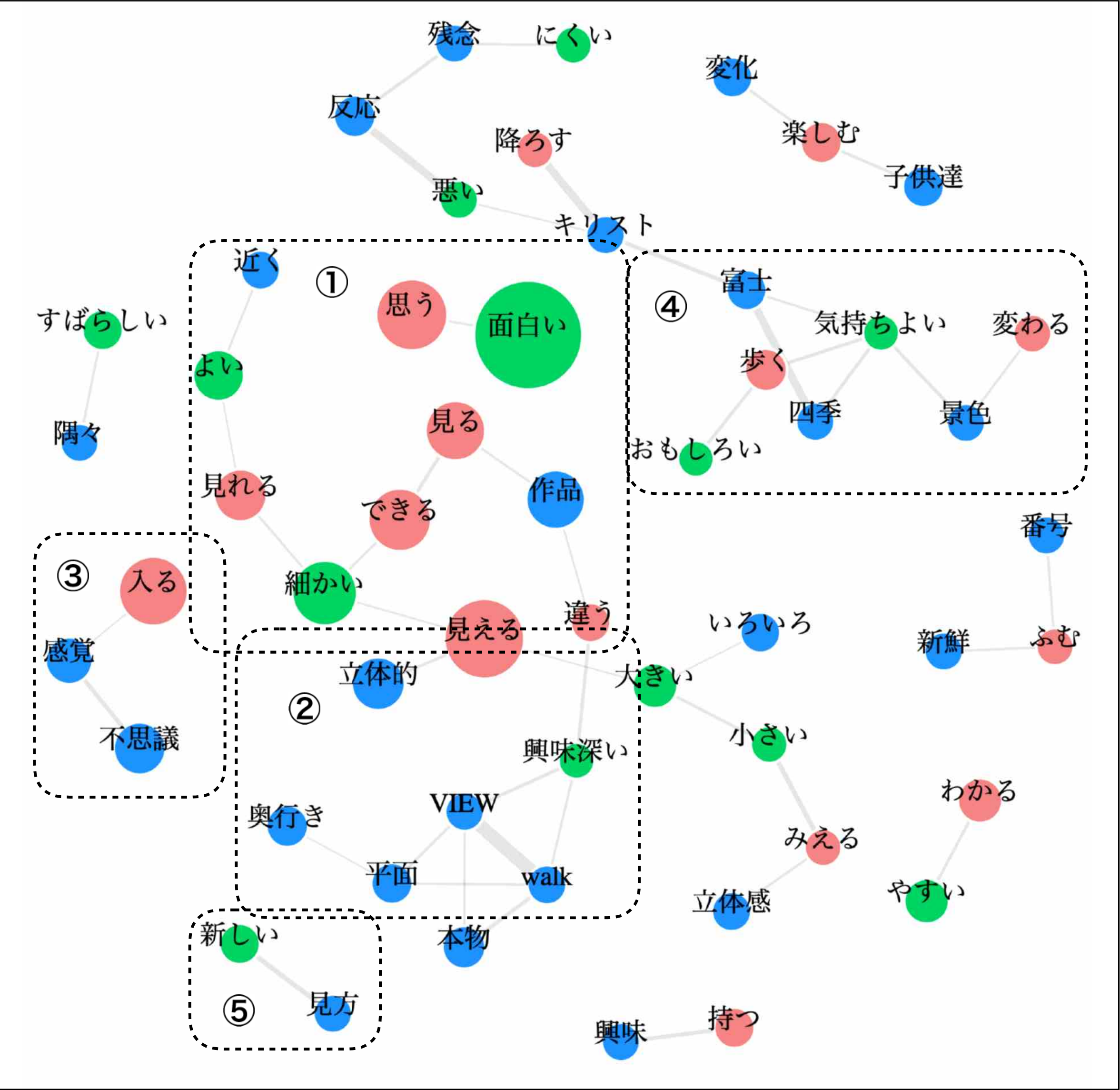


- 
- I 取り組みの概要とツールの紹介
  - II 鳥取県立博物館との共創のきっかけ
  - III 来館者の姿から
  - IV 教育普及ツール（Walk View）の検証について**
  - V 今後の取り組みと展望

以下，KJ法によるグルーピングを行い，主だったものの記述内容を示す      N=254      ( ) =人数

Q. Walk Viewを体験してみた感想を教えてください（自由記述）

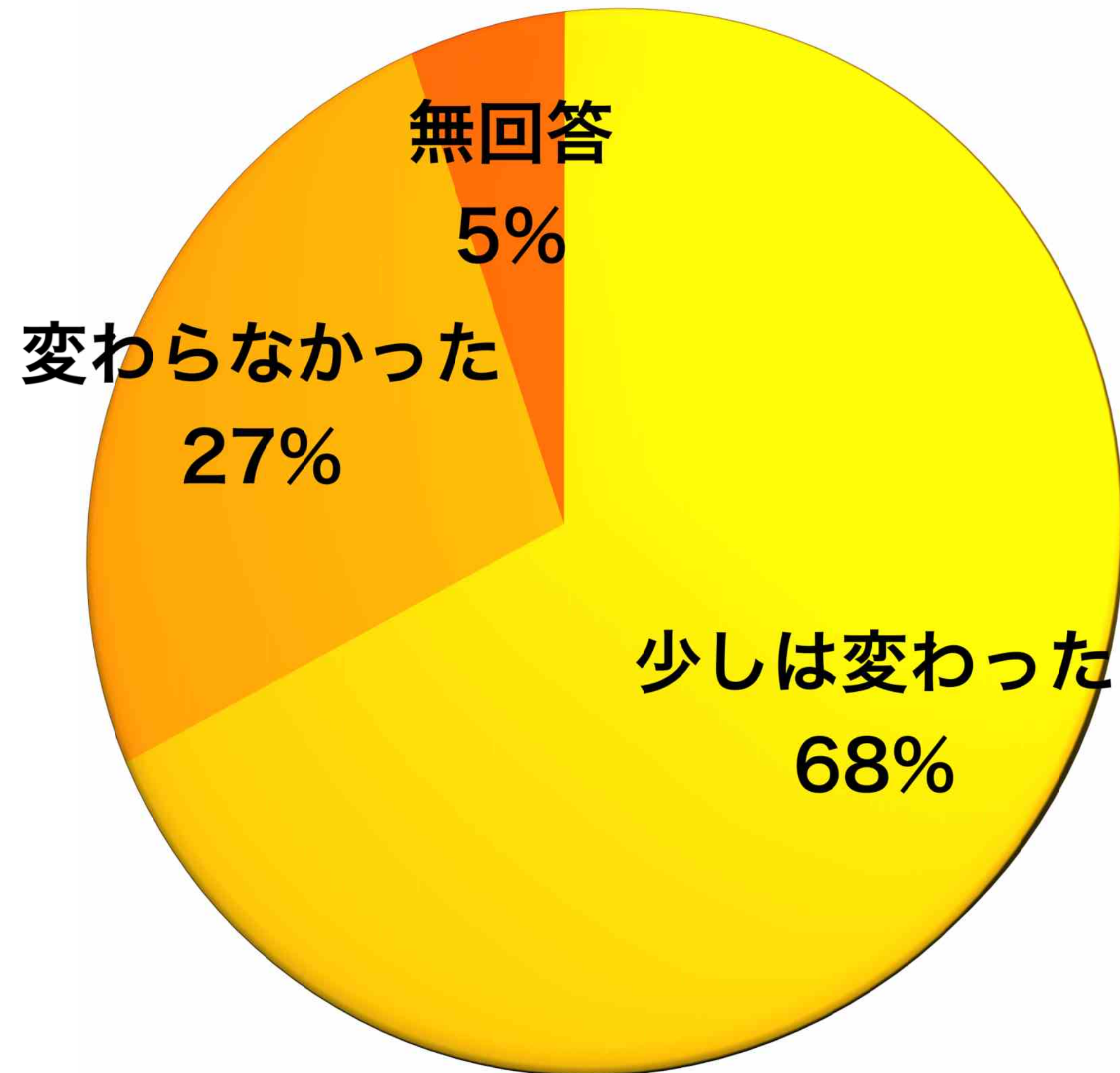
| キーワード項目       | 記述内容（抽出）                                                                                                                                                                                      |
|---------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 没入感(84)       | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 作品を対象として見るだけでなく，<b>その中に入り込んだような感覚</b>だった。</li><li>・ 不思議な世界の中に自分もいるように感じた。      ・ ストーリーが少し感じられた。</li></ul>                                             |
| 面白い（76）       | <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>絵に興味がない人でも，積極的に体験してみたくなる工夫</b>だと思った。 ・ 子供たちが大喜びでした。</li><li>・ 絵の細かいところまで立体的に見ることができ，表情などが印象に残りやすい。</li></ul>                                       |
| 細部の発見（41）     | <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>本物の作品を見ただけでは気づかなかった細部まで感じる</b>ことができた。</li><li>・ Walk Viewを見たあとだからこそ，その後で本物の作品を興味深く見ることもできた。</li><li>・ 見えにくい場所等が大きく見えることから，いろいろな発見につながった。</li></ul> |
| 鑑賞への関心・意欲（23） | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 2Dのものをより多角的に見ようという意識を持つことができた。</li><li>・ 子供が興味をもち，本物の作品も見ていた。      ・ <b>より絵を身近に感じて他のも見てみようと思った。</b></li></ul>                                         |
| システム面（19）     | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 歩いていくと作品の部分が見えるってすごいと思いました。</li><li>・ 機械の反応が悪かった・番号の書いてある床に立つだけで見え方が変わり不思議とびっくりでした。</li></ul>                                                         |
| わからなかった（6）    | <ul style="list-style-type: none"><li>・ よくわからなかった（作品を理解できない）。      ・ 余り変わらなかった。</li><li>・ 自分には絵をアップしたただけに見え，見方に変化がなかった。</li></ul>                                                             |
| きれい（3）        | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 楽しかったし絵がきれいだった。</li><li>・ 絵がきれいだった。</li></ul>                                                                                                         |
| こわい（1）        | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 中に入ったらこわかった</li></ul>                                                                                                                                 |
| 造形要素（1）       | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 鮮明に描かれているので，色彩，色の使い方が奥が深いことがわかった。</li></ul>                                                                                                           |



アンケート「Walk Viewを体験してみた感想」の共起ネットワーク

- ①作品の細部へ着目することができる  
鑑賞の際に見過ぎてしまいそうな作品の細部にまで近寄って着目し、観察することができる
- ②Walk Viewを活用することで平面の作品に奥行きを感じ、作品を立体的に見ることができる  
作品の奥行きを捉えることができる。また、それに対して興味深いと感じていることがわかる。
- ③絵の中に入るような感覚を体験することができる  
絵の中に没入するような感覚を味わい、同時に不思議な感覚を体験していることがわかる。
- ④身体感覚を使って作品を味わうことができる  
歩くようにしながら鑑賞できる特性を踏まえ、「気持ちよさ」「景色」などを感じていることが読み取れる
- ⑤新しい見方に気づくことができる  
「新しい見え方」という意味だけでなく、「今までざっくりとしか見ていなかったことに気づいた」などの回答も

「Walk Viewを体験した後に本物の作品を見たら、  
見方や感じ方に変化はありましたか？（少しは変わった or 変わらなかった）

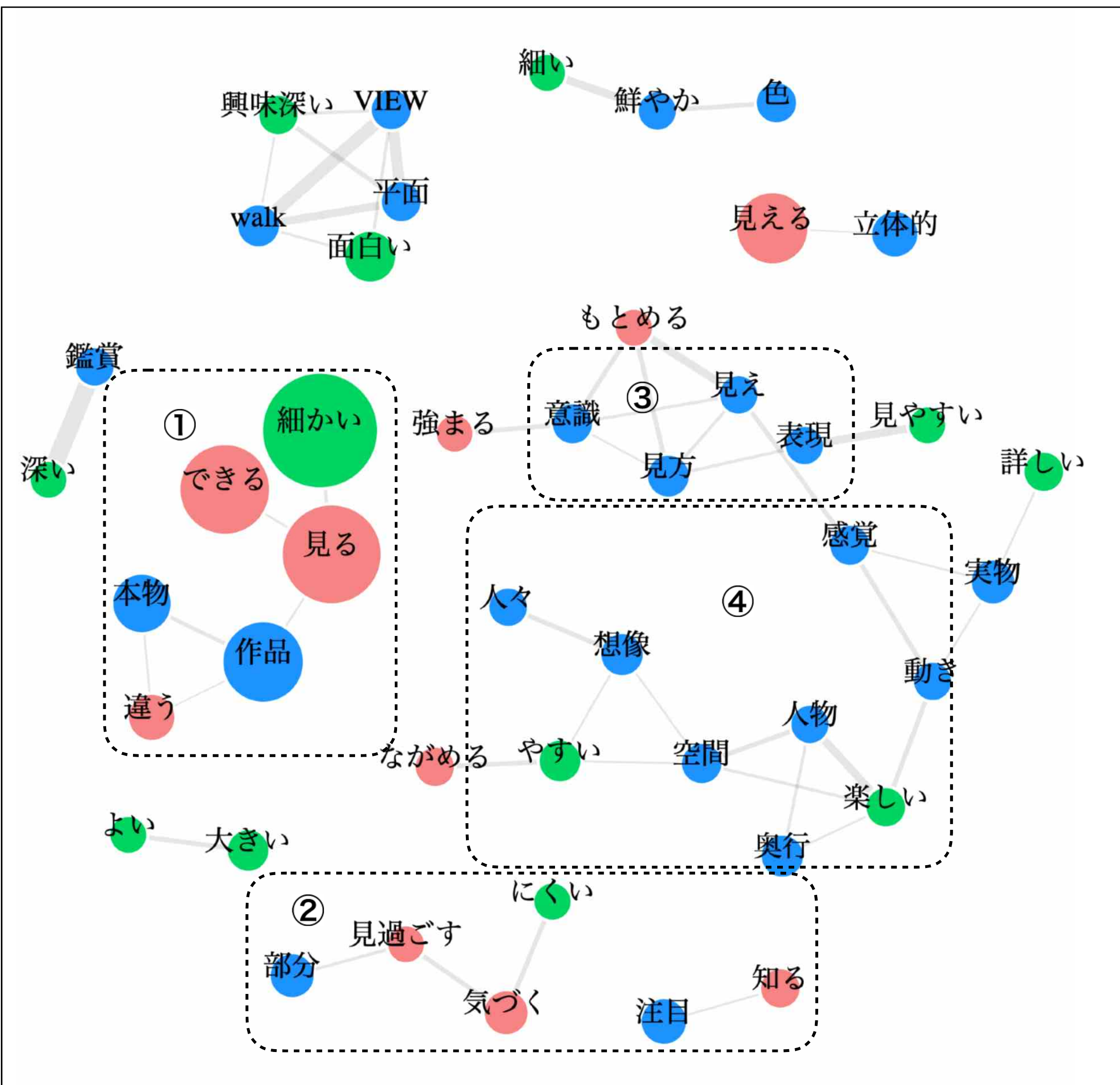


**N=254**（少しは変わった=172人，変わらなかった=69人，無回答=13人）

Q. 変化があった場合は、どんな変化か教えてください（自由記述）

N=172    n=132

| キーワード項目        | 記述内容（抽出）                                                                                                                                                                 |
|----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 細部への着目（63）     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・細かな描写に着目するようになりました。</li> <li>・全体を見るという見方を今までしていたが、細部まで見た。</li> <li>・あまり意識していない所をアップされたので、私はザックリとしか絵を見ていないことに気づいた。</li> </ul>     |
| 想像力（23）        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・より絵の中の人々のこと、人々が見ている風景を想像することができた。</li> <li>・その中にいるような気持ちで空間を想像した</li> <li>・番号順に見た絵の全体図を、ストーリーを追うように見ることができた。</li> </ul>          |
| Walk View優位（9） | <ul style="list-style-type: none"> <li>・Walk Viewの作品の方が面白く感じた。</li> <li>・本物の作品とは違い、迫力がありました。</li> <li>・細かな点はWalk Viewの方が見やすい。</li> <li>・元の絵が物足りなく感じた。</li> </ul>         |
| 臨場感（7）         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品の空気が少し変わったように見えた。</li> <li>・不思議な感覚で、実物の絵にも動きを感じた。</li> <li>・なんかよくわからないですが、本物でもその場にいるような、少しこわいような感じ…</li> </ul>                 |
| 関心の高まり（6）      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・Walk Viewを体験しなかったら、本物の絵はスルーしてたと思う。</li> <li>・本物の方をより興味深く見れた。</li> <li>・絵が身近になった気がした。</li> <li>・他の展示作品はどんな作品なのか興味がわいた。</li> </ul> |
| 全体と細部の行き来（5）   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・何かに注目すること、引いて全体を見ること、日常的に気にもとめていない見方・見え方が意識できた。</li> <li>・全体と細部の表現を行き来するようになった。</li> <li>・絵全体、隅々まで目が向くようになった。</li> </ul>         |
| 表現の工夫への着目（4）   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような色合いや筆使いかを確かめたくなった。</li> <li>・作者のこだわりがわかるような気がしました。</li> <li>・絵に描かれているものすべてに意味があるということを改めて感じた。</li> </ul>                    |
| 造形要素への着目（4）    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・構図の面白さをより感じた。</li> <li>・絵の中に奥行きを感じた。</li> <li>・より色がはっきり見えた。</li> <li>・筆の跡や絵の具の感じが目立った。</li> </ul>                                |
| じっくり見る（4）      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・じっくり見たくなった。</li> <li>・絵の中に何が隠れているのか気になり、よく見ようという気持ちになった。</li> <li>・もっと、じっくり細かい部分まで見ていたいと思うようになりました。</li> </ul>                   |
| 実物感（3）         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・画面が明るい分、実物はそれなりのおもむきがあった。</li> <li>・実物はより歴史を感じた。</li> <li>・大きく感じた。</li> </ul>                                                    |
| 明瞭度（3）         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験した後では全体がハッキリ見えた気がする。</li> <li>・本物を眺める方が見やすいと感じた。</li> <li>・具体的になった。</li> </ul>                                                 |
| 達成感（1）         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ウォークビューを体験して本物を見て、より達成感を感じることができました。</li> </ul>                                                                                  |



### ①オリジナル作品の細部まで鑑賞しようとする姿勢

「もっとじっくり細かい部分までみていたいと思うようになった」「達成感を感じた」「他の展示作品はどんな作品なのか興味がわいた」

### ②見過ごしがちな作品部分に注目するようになった

「見えなかったり見過ごしていたりする部分に気付くことができました」「普通に作品を見るだけでは注目できないところに注目できて、作品を知ることができると思った」

### ③普段とは違う見方を意識できた

作品そのものから受ける感覚や味方の変容（「作品の雰囲気や空気が変わったように感じた」）

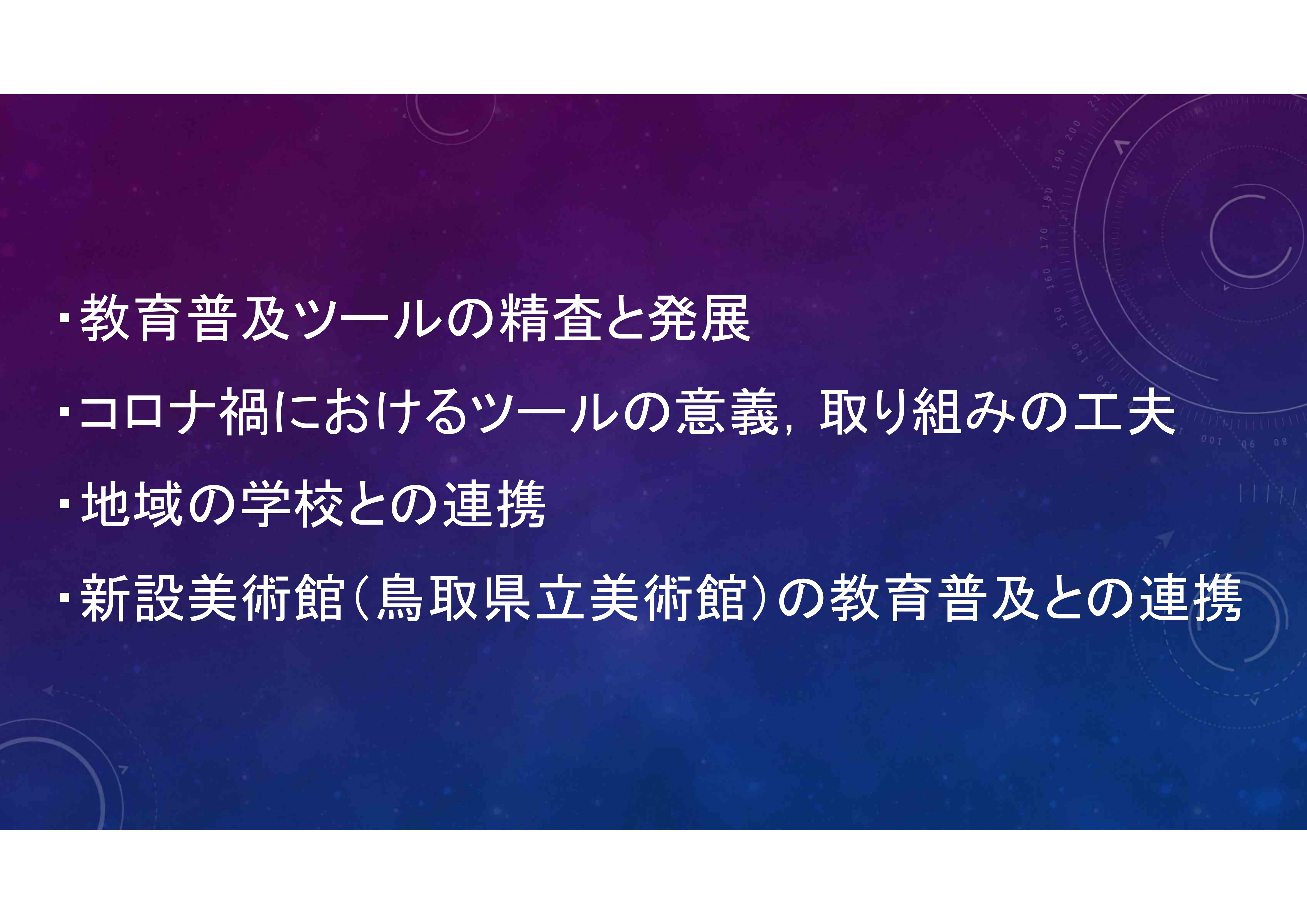
鑑賞者自身の鑑賞態度の変容（日常的に気にも留めていない見方見え方が意識できた）

### ④オリジナル作品の空間などを感覚的に想像することにつながった

「より絵の中の人々のことや、人々が見ている風景を想像することができて面白かった」「キリストのは少しこわい感じ」

アンケート「変化があった場合はどんな変化か」の共起ネットワーク

- 
- I 取り組みの概要とツールの紹介
  - II 鳥取県立博物館との共創のきっかけ
  - III 来館者の姿から
  - IV 教育普及ツール（Walk View）の検証について
  - V 今後の取り組みと展望

- 
- 教育普及ツールの精査と発展
  - コロナ禍におけるツールの意義, 取り組みの工夫
  - 地域の学校との連携
  - 新設美術館(鳥取県立美術館)の教育普及との連携

Diving Spot 2



最後までお聞きくださりありがとうございました  
[mio.h1226@gmail.com](mailto:mio.h1226@gmail.com) (畑山 未央)